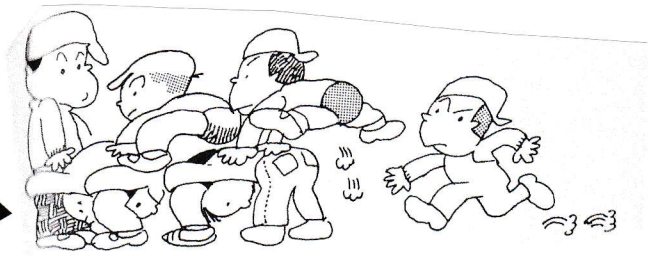

B 医師に聞く

前回のぜんそくだったヒデくんのお話に出てきたB先生（現在小児科開業医）を訪ねました。

B先生は四日市公害判決が出る直前の1972年5月～3年間、1976年5月～1983年までの通算10年塩浜病院で勤務されました。その間、四日市公害健康被害認定審査会委員もされています。

当直医の時、毎日のようにゼーゼー、ヒューヒューされて駆け込む患者を診てきました。同じ人が毎晩というケースもあったようです。注射をして症状がおさまると帰ってもらう日々でした。磯津の方が多かったようです。…ただ、子どもの場合は夜は少なく、昼間の外来で薬を出すことが多かったと思います。重症になる子は少なく、場所も磯津に限られてなかったと思います。しかし、子どもの場合は治療の段階で「再発」することも多かったように感じました。

そんな中、服部吉秀くんのことはよく覚えています。（右、関連記事参照）

気の優しい、内気そうで、弱々しい感じでした。（B先生は何度もそのことを繰り返されました。尊い、幼い命が絶たれていくことへの痛恨の思いがあられると感じました。）入院していた吉秀くんの様子も語られました。

吉秀くんの事実との出会い（お母さん、お父さんとの出会い）は私（萩森）にとっては谷田尚子ちゃんと同じように、今のささやかな活動の原点ですから大変関心を持って聞かせていただいた次第です。

そのお話しの中で出てきた「減感作（げんかんさ）療法」について少し触れます。減感作療法と言うのは、アレルギーの原因になるものを週2回ほど背中にちょうどツベルクリンのように、うすいうすい濃度から注射して、それに対する抵抗力をつけるという療法だそうです。現在はダニ、ホコリ、花粉、蜂などが原因となる喘息、アレルギー性鼻炎、花粉症、蜂アレルギーで行われているようです。大変時間を要する治療をで、患者さんも効果が実感しにくく、途中で治療中断されるケースも多く、今は経口減感作療法も試されているようです。

いずれにしろ、吉秀くんはたくさんの辛い治療に耐えながら、何とか治り、再び学校に行けて友だちとの普通の学校生活を望んでいたに違いありません。B先生とは、他にもコンビナートの危険性（硫化水素漏れ）・老朽化などや当時の呼吸器検査などについても意見交換させていただきました。　　2014.1.19